

ある予備役将校の日露戦争体験（二）

—神戸市文書館所蔵・山脇延吉家文書所収の軍事郵便を読み解く—

目次

はじめに

一 山脇延吉と山脇延吉家文書について

1. 山脇延吉について

2. 山脇延吉家文書と山脇延吉の日露戦争関係軍事郵便について

二 軍事郵便から見た山脇延吉の日露戦争体験

1. 日露開戦と第一〇師団への応召と出征

2. 大孤山上陸から岫巖・分水嶺・析木城の占領

3. 遼陽会戦と山脇延吉少尉負傷（以上、第九六号掲載）

4. 沙河会戦とその後の越冬対陣（以下、本号掲載）

大谷 正

専修大学文学部教授

5. 黒溝台会戦と奉天会戦

6. 奉天北方の警備と帰国まで

むすびにかえて―山脇延吉と在郷軍人会活動―

二. 軍事郵便から見た山脇延吉の白露戦争体験

4. 沙河会戦とその後の越冬対陣

遼陽の戦闘後、負傷して野戦病院に入院していた山脇は、九月二七日に退院して、中隊に復帰した。その時、所属部隊は遼陽の南方一里の場所に止まっていた。その後、山脇は中隊とともに北進して、沙河の会戦に参加することになった。

ここで、本資料紹介の理解を助けるために、山脇が所属した第四軍の白露戦争における戦闘履歴を示した、表3「第四軍の参加した主な戦闘」を掲げる。この表のように、第四軍は、遼陽の会戦の後、遼陽と奉天の間地点にある沙河地域で増強されつつあるロシア軍と対陣し、沙河の会戦の後、越冬対陣に入った。その後は、黒溝台の戦闘があったものの、奉天会戦までは防寒と防弾を兼ねた掩蔽壕に籠もって、補給と越冬に努めた。なお、第四軍は沙河と奉天会戦では、戦闘の主力として戦績を挙げる一方で、多数の死傷者を出している。

第四軍の司令官は野津道貫大将、参謀長は上原勇作少将であった。上原は日向都城生まれである。都城は宮崎県の一部であるにもかかわらず、島津氏の発祥の地であることもあって、薩摩閥の一部という意識の強い場所であつ

表3 第4軍の参加した主な戦闘

戦闘名	時期	日本軍 兵力	ロシア軍 兵力	日本軍 損害	ロシア軍 損害	
析木城	1904年7月30日～ 8月1日	34400	33000	836	1217	
遼陽	8月25日～ 9月4日	134500	224600	23533	約2万	日本軍主力とロシア軍主力の初めての会戦、日本軍は遼陽を占領したが、ロシア軍の包囲殲滅に失敗した。
沙河	10月8日～ 10月18日	128000	221600	20497	41346	遼陽を占領した日本軍を、ロシア軍が攻撃。両軍は10日以上にわたって沙河周辺で戦闘を行い、両軍に甚大な損害が生じたが、戦線は膠着状態となり、越冬に入った。
黒溝台	1905年1月25日～ 29日	53800	105100	9316	11732	ロシア軍は、旅順の陥落を受け、乃木の第三軍が到着する前に、攻勢をとったが失敗した。
奉天	3月1日～ 3月10日	249800	309600	70028	60093	日本軍は総力を挙げ、奉天のロシア軍を攻撃、包囲殲滅を目指した。日本軍は多大の被害を出しながらも辛勝したが、戦闘目的を達成できなかった。

桑田悦編『日本の戦争一図解とデータ』（原書房、1982年）参照。損害は、戦死者、戦傷者、行方不明者の合計。

た。また、上原は野津家で書生をしたことがあり、野津から近代戦における工兵の重要性を強調され、一八八一年から一八八五年まで、フランスのフォンテンブロー工兵学校に留学して日本陸軍における工兵育成の指導者となり、帰国後、野津の娘と結婚して、娘婿となった。^①野津は薩摩藩士の出身で、戊辰戦争、西南戦争、日清戦争そして日露戦争の各戦争で前線に立ちつづけてきた「猛将」であった。日清戦争では、当初、第五師団長として、ついで山県有朋が第一軍司令官を更迭された後は第一軍司令官として、遼東半島から遼河平原の戦闘に従事して、大本営の意向に逆らって戦闘を続け、多大な損害を出した。この時の第一軍参謀に上原がいた。日露戦争では、各軍の司令官と参謀長の間がしっくりいかず、意見対立から参謀長が更迭される場合もあったが、上記のような野津と上原の関係もあって、第四軍は軍司令官と参謀長の関係が良好であった。

沙河の会戦の概要は下記の通りである。

この頃、ロシアの満州陸軍はアレクセイ・クロバトキン満州軍総司令官（元陸軍大臣）の単独の指揮下にあったが、新たにドイツ系のロシア軍人で、中央アジアへの遠征と露土戦争で功績を挙げた、グリッペンベルグ將軍が満州に派遣されることとなった。この情報に接したクロバトキンは、遼陽北方で対陣していた日本軍への攻撃を決意した。

一九〇四年一〇月八日夜半、ロシア軍の攻撃が始まった。この時、日本軍は約一二万、ロシア軍は約二二万で、両国の兵力には大きな差があったが、ロシア軍の攻勢に対して日本軍は効果的に反撃して大きな損害を与えた。一〇月一〇日から、逆に日本軍がロシア軍に攻撃を仕掛けたため、ロシア軍は沙河北岸に退却した。日本軍は退却するロシア軍を追撃して、さらに攻撃を行おうとしたがロシア軍の反撃を受けて、今度は日本側が多大な損害を被って退いた。沙河周辺に対陣していた満州軍は、この戦闘で弾薬がつかえて攻勢が困難になったにもかかわらず、大本営が旅順攻囲戦を優先して弾薬を旅順に送ったことと、冬季に突入して軍隊行動が困難となったことから、塹壕で待機することになった。以後、日露両軍は膠着状態になり、春まで戦線は動かなかった。

以上の沙河の会戦のなかで、山脇が所属する第四軍、とりわけ第一〇師団が体験した最も厳しい戦闘は、一〇月一二日に日付が変わったと同時に行われた、ロシア軍陣地の三塊石山に対する夜襲であった。はじめは姫路の第八旅団が攻撃を担当したが、ロシア軍の抵抗が烈しかったために占領できず、つづいて福知山の第二〇旅団（山脇延吉の属する歩兵第二〇連隊と山脇嘉作の属する歩兵第三九連隊から構成される）と後備第一〇連隊も投入され、夜明け頃に山頂を占領した。この日、第四軍の左側に位置していた第二軍も大きく前進したので、翌日一二日になるとロシア軍の撤退が始まった。このように、第一〇師団が中心になって、多大の犠牲を払いながら占領した三塊石

山の戦いは、沙河の戦いで最も重要な戦闘であった。退却するロシア軍を追って、日本軍は一三日、一四日と追撃を行ったが、一五日以降、日露両軍による万宝山をめぐる攻防が行われた。日本軍は一度奪った万宝山をロシア軍に奪還され、沙河の南岸まで後退して、越冬対陣に移った。²⁾

第四節関連で、山脇が日本に送った軍事郵便は、文書番号¹⁹⁾から²⁶⁾である。

この中で、沙河の戦闘に直接触れているのは、文書番号¹⁹⁾（一九〇四年一〇月二九日）と²¹⁾（同年十一月一三日）の手紙である。それ以外は、冬期対陣の様子と、故郷からの連絡に対する感想や家業に関する指示を記したものであった。

文書番号¹⁹⁾は、沙河の戦いから一〇日後に書かれたもので、一〇月二八日に、同じ道場村出身で、歩兵第三九連隊所属の山中上等兵から得た、本家の山脇嘉作少尉の戦死の模様を伝えているので、その部分を引用する。

拝啓昨日歩兵第卅九連隊ノ山中上等兵（道場川原大工山中熊吉ノ子）ヨリ山脇嘉作君戦死ノ悲報ニ接シ驚愕悲哀措ク処ヲ知ラズ、灯台本暗シト実ニ此事ニ候。嘉作君ノ中隊長有川大尉殿死戦ノコトハ其当時風説アリシモ、嘉作君ノコトハ知ラザリシカ。何分此度ハ戦線ノ横巾数十里ニ亘リ、而モ毎日毎日猛烈ナル追撃戦ニテ、同連隊中ニテモ大隊御互ニ其所在ヲ知ラズ、大隊長ハ某中隊ノ所在地ヲ知ラザリシガ如ク、実ニ猛烈ナル追撃ヲ行ヒツ、アリシ際ニシテ、同君ハ歩兵第卅九連隊ガ我が第廿連隊ト共ニ、両軍（日露）勝負ノ決勝点タル三塊石山ノ敵陣ニ向ツテ猛烈ナル夜襲ヲ行ヒタルノ日、名譽ナル軍旗護衛小隊長トシテ同隊軍旗ヲ護衛シツ、前進中、旗手ハ名譽ノ戦死ヲ遂ゲタルニヨリ、嘉作君代ツテ同軍旗ヲ奉持セラレ旗手トシテ前進シ敵陣ニ突撃セラレタルモ、不幸敵彈ノ為メニ連隊長安村大佐殿等ト共ニ名譽ノ戦死ヲ遂ゲラレタリトノコトニ御座候。此日伊藤安平君モ臀部ニ重傷ヲ受ケタリ。

呼鳴（マ）三塊石山ノ夜襲、遼陽先登ト共ニ其名声ハ万世ニ芳シカルベキモ、個人ノ私情ニ於テ怨ノ深キ一小兵、兩軍死力ヲ出シテ戦ヒシ丈其死傷モ亦莫大ナリキ。本家初メ親族一同御愁傷ノ程遙察仕候。昨日本家へ書面差上置候へ共、宜敷申上被下度候。此度ハ敵ノ死傷莫大ニシテ、昨日英字新聞（而モ親露派）ニヨルニ、露兵死一万二千、傷者五万五千七百余ト記載有之候、以テ如何ニ大打撃ヲ加ヘヤリシカラ知ルニ足ル、誠ニ皇軍向フ所無敵トハ此事ニ御座候。（後略）

一〇月一日の三塊石山のロシア軍陣地攻撃には、三九連隊所属の山脇嘉作と二〇連隊所属の山脇延吉の兩人は共に参加していた。しかし、同じ第一〇師団の、しかも同じ第二〇旅団に所属して、同じ時間に同じ場所に対して攻撃を行っていたにもかかわらず、連隊が違うと情報が伝わっていなかったのである。

三塊石山の攻撃では、先ず歩兵第八旅団に属する、歩兵第一〇連隊（姫路）と第四〇連隊（鳥取）が攻撃したがロシア軍陣地は反撃を続けたので、つづいて歩兵第二〇旅団所属の歩兵第二〇連隊と三九連隊と後備第一〇連隊の三個連隊が追加投入されて、ようやくロシア軍陣地を占領した。³この時、第三九連隊長安村範雄大佐が戦死した。同時に、連隊旗手品川少尉が戦死、連隊旗警護小隊長の山脇嘉作少尉が代わって連隊旗を持ったがまた銃弾に倒れ、さらに代わった下士官も倒れるという事態に至った。戦闘の後で姫路に持ち帰られた歩兵第三九連隊の連隊旗は、「血染めの連隊旗」として有名になった。

山脇は、本家に手紙を送って遺族を慰めたが、家族にも「宜敷申上被下度候」と念を押している。文書番号②の手紙は、⑬の二週間後の十一月一三日に書かれたものであるが、そのなかでも、「本家様ハ一同定メシ悲哀ノコトト存シ氣ノ毒ニ不堪候。同情御察申ス外無之候。去リナガラ同君ガ軍旗ヲ捧持シ旗手ノ代理トシテ戦死シ、而モ其鮮血ヲ以テ軍旗ヲ染メタルノ名譽ハ軍人トシテ此上ナキコトニ御座候。本家様へ宜敷申上被下度候」と記してい

る。

沙河の戦闘の後、すでに述べたように、日露両軍とも沙河を挟んで塹壕を掘り、縦深陣地を構築して対陣した。これは、第一次世界大戦の西部戦線の塹壕戦と同じ情況が、一〇年前に極東で生じていたことを示している。先ほど後半部分を紹介した手紙②の前半部分は、沙河の対陣が始まったばかりの状況を伝えており、まだ一月中旬にもかかわらず寒気は日本国内の厳冬期と同様、あるいはそれより厳しいこと、水が不足し、しかも水質不良であること、当然、入浴などできないこと、塹壕での生活（「穴居」と表現）と人家での休息（舎営）を繰り返していることが書かれている。

拜啓当地ハ日々寒氣加ハリ申候、全ク内地ノ寒中同様ニ御座候、殊ニ其寒風ハ内地ヨリモ甚敷候。

此頃居ル所ハ井水ニ乏シク、一椀ノ水モ中々大切ニ御座候。其水ガ泥水ニテ茶碗ノ底ニ泥ガイツキ申候。折角内地ヨリ来ル白米モ飯ニ煮ルト小豆飯ノ様ナ色ニ相成申候。之レデモ身体ニ障ラズトハ妙ニ御座候。全ク身体ガ土地ニ慣レ支那人同様ニ相成候次第ニ御座候。身体ハ誰モカモ脂肪質ガヌケテガサガサニ相成、三四十日モ入浴セズ一週間位顔ヲ洗ハヌコト多ク、将卒ノ顔色ハ黄色ヲ帯ビ丸デ土テ造リシ人形ノ顔ト同然ニ御座候。内地ノ人ガ見タナラバ、バケ物ト云フニ相違ナシト、皆々自分ノ顔ノ色ガ見ハヌモノ故、他人ヲ笑ヒ申候モ可笑候。

毎日毎日一週間土中ノ穴居ハ中々困難ニ御座候。一昨日ヨリ六日間ノ休養ニテ人家ニ入り申候。六日休メバ又々山ヘ行き熊ノ様ニ穴住ヒ致スコトニ御座候。毎日毎晩ボンボン、ドカンドカンノ銃砲声絶間ナク景氣ヨロシク候。（後略）

そして、以上のように述べた後、「十一月三日、即ち天長節ハ前哨線中ノ最前線ニ在テ迎ヘ申候、明治卅七年之

天長節ヲ当地ニテ、而モ戎衣ヲ蒙リテ迎ヘントハ夢ダニ思ハザリシコトニ候」、と記している。四月一日に、福山の兵營に入隊して以後、すでに半年以上が過ぎていたが、戦争の行く末が全くつかめないなかでの、山脇の正直な感慨である。

文書番号²⁶〔一九〇四年二月二日〕の手紙は、塹壕での対陣が二ヶ月を過ぎ、寒気が一層烈しくなった情況を伝えている。塹壕戦になって時間的余裕があったのであるう、この頃は長文の手紙が多い。最初に、出征以来の戦鬪を振り返り、「不日平和克復ノ曙光ニ接スルヲ喜居候」と、戦争の終結を期待する言葉で結び、つづいて戦場の様子を詳しく描いているが、紙幅の関係でごく一部しか紹介できない。

光陰矢ノ如ク明治三十七年モ早ヤ十日ヲ残シ申候。去ヌル四月ノ十一日、三田ヲ発シ福知山行ノ列車ニ乗リシハ既ニ業ニ遠キ過去ニ属シ、五月五日兵營ヲ後ニシテ出征ノ途ニ上リ、六日ノ夕方郷家へ歸リ一泊セシコトモ亦遠キ過去トナリヌ、五月十九日大孤山沖ニ上陸シテヨリ以来幾多ノ艱苦ニ耐ヘ、身命ヲ忘レテ君国ニ尽シ、數回ノ激戦ヲ経テ今日ニ至リ、此間幸シテ一度モ病ニ罹ラズ、唯遼陽ノ役ニ微傷ヲ蒙リシノミ、之トテモ天佑ヲ得テ日ナラズシテ癒ヘ、未ダ一回モ戦鬪ニ列セザリシコトナシ。誠ニ幸福ニシテ武運長久トハ此事ト独リ喜ビ居候。早ク此三十七年ヲ忘レテ芽出度ク明治三十八年ヲ向ヘ、不日平和克復ノ曙光ニ接スルヲ喜居候。家族一同トテモ御同様ト遥察致候。(中略)

忠勇ナル兵卒ノ労苦ハ実ニ謝スル外ナシ。昼間ハ地下二尺位迄凍レル堅キ岩ノ如キ土ヲ掘リテ防禦工事ニ余念ナク、夜間ハ寒風ニ吹キ荒サレツ、歩哨ニ立チテ敵ヲ警戒シテ怠ラズ、衣食ハ以テ勞ヲ慰スルニ充分ト云フヲ得ズ、而モ彼等ハ真面目ニシテ毫モ惰氣ナシ。我ハ部下ヲ我ガ子ト思ハザラントスルモ不能、実ニ愛兒ノ如キ可愛忠勇ナル我部下ヨ、我ハ是等ノ無邪氣ナル部下ニ慰籍セラレテ、所謂陣中ノ一家ヲ形造リ、時々団辯(欒カ)ノ楽ヲ得ツ、アリ。我ハ忠勇ナル此勇士ノ一小隊長タルヲ最大ノ榮

誉ト信ジ、最口勇士ヲ率イテ為邦家ニ尽瘁スルコトヲ唯一ノ樂ト考フ。（後略）

厳冬期の満州では防寒用の衣服、外套、靴、靴下などが必要であり、以前から山脇はこれらの防寒具を日本で整えて将校用の追送品として送るように、家族に指示していた。すでに述べたように、急行軍がつづいた遼陽までは追送品が届かず、山脇は家族に不満を述べる手紙を送っていたが、遼陽の会戦以降、戦線が停滞すると、順調に追送品が届くようになった。しかし、満州の寒気は予想以上のもので、日本で作って送らせた防寒用外套は役に立たず、山脇は軍服の裏に、狐・羊・犬の毛皮を現地で購入して縫い付けて防寒の備えを行い、さらに一面白銀の世界で戦闘するため、黒色の冬服の上に白の夏服を着てカムフラージュするなどの工夫を凝らしていたことが、つぎに掲げた文書番号②⑤（一九〇四年二月八日）の手紙からうかがわれる。

拝啓十一月廿八日出之書面本日到着致候。九月、十月ノ追送品四五日前確ニ受取申候。毎々沢山ニ御送り被下有難存候。追送品ノ被服ハ最早充分ニ付、御送り被下間敷候。靴モ充分ニ付、十一月分ニテ御送り被下候モノニテ最早充分ニ御座候、軍服モ充分ニ御座候、余リ沢山御送り被下候テモ致方無之候。

当方ニテ先般、狐及羊及犬ノ毛皮ヲ買ヒ夫々軍服ノ裏ニ付ケ申候。之ナラバ充分防寒ニ差支無之事ト考申候。過日杉森ヨリ送リ来リシ外套モ防寒ノ用ニ立チ不申候、折角高価ノモノヲ作り残念ニ候。但シ防寒用外套仕給セラレ有之候間、何人モ携帯セル外套ハ使用致不居候、ソー沢山着用出来ルモノニ無御座候間、御休神被下度候。小生程結構ニ追送品ノ来ルモノ無之、実ニ留守宅ノ好意ヲ謝シ申候。目下冬服ニ上ニ夏衣ヲ太クシテ着用致居候、之レハ冬服ハ黒色ニテ目立チ候ニ付敵ニ目立たヌ為メニ候。毎々御送り被下候「ガーゼ」及脱脂綿モ既ニ沢山ニ付、最早御送り被下間敷候、此上御送り被下候テモ致方無之候。食物ハ何品ニテ

毛沢山程結構ニ候、此頃ノ如キ追送品モ到着仕候ハバ前哨露営ノ苦ヲ忘レ申候。(後略)

衣服と嗜好品の他に、山脇が送るように頼んでいたものは、南京虫退治ののみ取り粉や歯磨き粉などであったが、この他に凶書を求め、「書物ハ戦争画報類ノモノモ宜敷ガ、文芸クラブ流ノモノヲモ御送り被下度候」(手紙⑬)と書いている。また、当初は新聞の送付を求めていたが、遼陽の会戦での戦傷が記事になって以来、各新聞社から直接送られてくるようになったらしく、すでに一部引用した手紙⑳(「二月二日付」)には、多くの新聞を読んでいる様子が、次のように書かれている。「陣中ノ楽ハ郷里ヨリ来ル音信ニ限ル、毎便郷里ヨリ音信ノ来ル程楽敷モノハナシ、幸ニ此頃ハ沢山来ル故大ニ慰藉セラレ候。遼陽ノ戦争ニテ小生負傷以来、種々ノ方面ヨリ新聞紙ヲ送り呉レ、今日ニテハ朝日、毎日、神戸、神戸又新、日本、報知、時事等ノ新聞ヲ読ミ申居候、遼陽後初メテ国民ハ軍隊ノ勞ヲ知リシカト思ハレ、人生ノ凄マシサヲ感申候」。

以上のように、故郷からの手紙と二週間程度遅れて到着する新聞を読むことで、戦場にいながら山脇は、自分たちが従軍している日露戦争の状況を把握できるようになった。

これ以外に、家業の金融業をめぐるトラブルに関する手紙が何通かある。文書番号㉑の手紙(一九〇四年一月四日)では、「金貸ハツマラヌ商業ニ候間、凱旋後ハ一切止メ可申候。貸金ハ倒サレ、又ハ偽ナリト云レタリ迄シテモヤラネバナラヌモノニモ無之、ヤハリ山へ樹ヲ植込ムノガ一番性ニ合ツタ仕事カト存候。君国ノタメ身命ヲ捨テ、迄モ働タ出征軍人留守宅ヲ、裁判所ノ御役人ニ出入サレテハ甚迷惑千万ニ御座候」と書かれており、帰国後は貸金業を辞め、植林事業に集中したいという希望を述べている。なお、植林に関して家人に具体的な指示を認めている手紙は、この前後に何通も見られ、山脇の関心が父親から受け継いだ金融業ではなく、自らが始めた植林事業

にあったことが分かる。

5. 黒溝台会戦と奉天会戦

沙河の対陣が行われているなかで、日露戦争の状況は変化した。一九〇五年一月一日、ロシア軍旅順要塞司令官ステッセルは降伏を申し入れ、翌日二日、旅順北方の水師營で旅順開城交渉が行われ、旅順開城規約が調印された。一九〇四年七月二六日から始まった旅順攻防戦は一六一日に及び、この戦いを担当した乃木希典大将の率いる第三軍は、死傷者五万九三〇四人、疾病患者約三万、合計一〇万の損害を出した。

旅順陥落の報に接した日本軍の満州軍総司令部は、旅順の戦いを終えた第三軍の北上を待ち、奉天攻撃を目指す作戦計画を、一月二二日に決定した。この頃、ロシア軍も日本の第三軍が到着する前に、ロシア軍の第一軍・第三軍で日本軍を牽制したうえで、グリッペンベルグ大将が指揮する第二軍が日本軍の西側、すなわち黒溝台を突破して、日本軍を包囲する作戦を開始した。

一月二四日夜から二五日にかけて、ロシア軍第二軍（総兵力一〇万五〇〇〇人）は、黒溝台方面の秋山支隊（騎兵一個連隊）と少数の守備隊を攻撃した。ロシア第二軍の攻撃で日本軍は撃退されたので、日本軍満州軍総司令部は、予備兵力として後方に置いていた、第八師団（弘前）と次いで第五師団（広島）を投入したが、支えきれなかったため、さらに第二師団（仙台）と第三師団（名古屋）を前線から抽出して派遣し、黒溝台・沈且堡方面でロシア軍と抗戦した。戦闘は二九日までつづいて、ロシア軍第二軍が撤退し、日本軍は危機を脱した⁴。

この後、二月末から奉天を目指す日本軍の攻勢が始まった。日本側は、大本営直轄軍の鴨緑江軍と満州軍総司令部指揮下の第一・第二・第三・第四軍がすべて参加し、総兵力は二四万九八〇〇人に達した。これに対する奉天周

辺のロシア軍は総兵力三〇万人を超え、日本軍より優勢であった。

まず、二月二二日から鴨緑江軍が東側から攻撃を開始した。そして、三月一日から満州軍の一斉攻撃が始まり、一〇日には奉天とその周辺を占領した。両軍の死傷者はほぼ五角であったが、日本軍は準備した砲弾三三万発を撃ち尽くし、鉄嶺方面に撤退するロシア軍を確認したものの、傍観するのみで打撃を与えることができなかつた。日本陸軍は勝利したものの、開戦以来の連続した戦闘と旅順要塞への無理な攻撃によって、訓練された将校、下士官、兵士を大量に失い、戦闘継続能力は限界に達しつつあつたが、一方のロシア軍は戦力にまだ余裕を残していた。⁵⁾

それでは、以上の全体情況のなかで、第四軍の動きを確認する。三月一日から始まつた奉天への攻撃で、第四軍は日本側の五個軍団の中央に位置し、苦戦を続けていた。しかし、三月八日、クロパトキンの命令でロシア軍が後退を始めると、奉天北方の鉄嶺方面への追撃を命じられた。ロシア軍は鉄嶺を越えて、さらに北方の四平街まで撤退したので、山脇の所属する第一〇師団は、鉄嶺北方の開原と昌図まで進出して防衛に当たつた。⁶⁾

第五節関連の軍事郵便は、文書番号²⁷⁾「一九〇五年一月二七日」から³⁴⁾「三月二九日」までの八通と、年月日不明の文書番号⁴⁸⁾の合計九通である。すでに説明したように、第一〇師団は黒溝台の戦闘の主要部分に参加していないので、黒溝台の戦闘に言及しているのは手紙²⁷⁾と²⁸⁾「二月八日」のみである。しかし、黒溝台の戦闘終了直後の二月二日に、山脇の所属中隊（歩兵第二〇連隊第五中隊）は駐屯していた房身で、連隊規模のロシア軍と激しい戦闘を交えて撃退し、第四軍司令官野津大将から感状をもらった。この戦闘に関しては、文書番号²⁸⁾と²⁹⁾「二月八日」の手紙に記述がある。また、奉天会戦に関連する手紙は、文書番号³¹⁾「二月二二日」から³⁴⁾「三月二九日」までの四通あるが、戦闘の内容には触れていない。

まず黒溝台の戦闘の最中の一月二七日付の手紙²⁷⁾では、旅順陥落の結果、バルチック艦隊に対する備えが強化さ

れたこと、およびロシアの血の日曜日事件について述べた後、黒溝台の戦闘について次のように述べている。

（前略）然ルニ敵ハ過日我方後方ヲ脅サントシテ見事ニ失敗シ、多大ノ損傷ヲ蒙リタル上、死屍ヲ残シテ敗走セシガ、昨日来我が第二軍ノ方面ニ一師団半ホド現出シ、昨夜来砲声盛ニシテ今尚停マズ目下戦闘中ナリ。敵ハ攻勢ヲ採り来ルノカ、マサカ左様ナ元氣モナカルベシ。万一攻勢デモトリクルモノナラバ、雪中ニ露助ノ「アイスクリーム」デモ出来可申候。誠ニ我師団ノ如キハ実ニ堅固ナル半永久ノ築城ヲナシ之レニ抛リ居ルコトナレバ、数十万ノ敵兵来ルトモ少敷モ恐ル、ニ不足、実ニ面白キ戦闘ガ出来可申候。過日敵ハ我方陣地ノ前方ニ軽気球ヲ飛揚シ申候、何ヲスルコトカ、此時小生ハ高地上ヨリ双眼鏡ニテ展望仕候、アリトナガメ候。此頃一望千里ノ広野ニ日露両兵ガニラミ合ヒノ姿、毎日毎日双眼鏡ノ見物、一種ノ活動「パノラマ」ニ御座候。

（後略）

手紙の最後の部分で、「毎日毎日双眼鏡ノ見物、一種ノ活動「パノラマ」ニ御座候」などと述べているのは、まさに黒溝台の戦闘を他人事のように感じている証拠である。しかし、このような感想も、身内の犠牲者が出たことを知ると、手紙²⁸（二月八日）では一変して、次のように述べる。「此度ノ戦役ガ如何ニ我一家ニ関係ヲ有スルカ、先ニ南山ニ亡兄、三塊石山ニ嘉作君ヲ失ヒ、今又黒溝台ニ野村（黒川ノ事）少佐殿ヲ失フ、悪ミテモ余リアル露国、飽迄膺懲セズンバ措ク不能、国ノ仇敵。家ノ仇敵。一族親族ノ仇敵。許シ難キ仇敵ニコソ、野村氏ノ如キハ実ニ好個ノ軍人、国家ノ為メニモ惜ムベキノ至リナリ、未亡人（マ）初メ親族一同ノ愁悼被察、戎衣ヲ濡サザルヲ不得直ニ郷家ヨリモ弔辞差上ラレ度候（東京牛込区北山伏町三十八番野村さな）。」

二月二日の房身の戦闘の最も詳しい記事は、手紙²⁹であるが、あまりに詳細すぎるので、手紙²⁸から、以下に引

用する。

(前略) 本月二日午前六時ヨリ我中隊ハ獨立シテ其兵力約三千ニ近キ敵ノ夜襲ヲ受ケ、全ク包圍セラレ一時將ニ全滅ノ悲運ニ遭遇セシガ、死力ヲ出シテ力闘シ敵ニ多大ノ損害ヲ与ヘ遂ニ敵ヲ撃退仕リ候。何分夜間誠ニ暗夜ノコトトテ一時ハ大ニ苦戦仕候ヘ共、其甲斐アリテ敵ヲ撃退仕候。此戦ハ出征以來初メテノ激戦ニ有之候。此戦ニ於テ中隊ニハ戦死八員傷十三有之候ヘ共、將校ハ皆無事、敵ノ損害ハ多大ナラン。而テ追激ノタメ敵兵二名ヲ生擒仕候、敵ノ兵力ノコトハ敵ノ捕虜ガ自白仕候。

此戦功ニヨリ連隊長、旅团长、師团长、閣下ノ非常ナル賞賛ヲ辱フシ、將校一同ニ対シテハ師团长閣下特ニ盛宴ヲ張ラレ、自ラ酌ヲナシテ非常ナル御馳走ニテ接待セラレ、小生等ノ如キ光榮身ニ余リ候。又一般ニ対シテハ師团长閣下ヨリ酒一樽、又旅团长閣下ヨリモ酒一樽ヲ贈リ申候。又過日親戰慰問中ノ衆議院議員ハ此偉効ヲ聞キ深ク感謝ノ意ヲ表シ酒一樽、肴若干ヲ送り来リ候。師团长ガ宴会ヲ催サレテ、中隊付ノ將校ヲ招カレタルガ如キハ今回ガ初メニシテ又今後トテモナカラン。其席上ニテ詳敷中隊長殿ヨリ戦況ヲ説明セラレ、小生等モ亦陳述仕候。東京日々、神戸又新日報ノ新聞記者モ席上ニ列セリ、誠ニ大モテニテ却テ氣ガ張り申候。之レモ嘉作君、亡兄、野村少佐殿等ノ英靈ノ加護ニ抛ルコト不少ト、深ク感謝ノ意ヲ表居候。

本日午后四時ヨリ戦死者ノ忠魂ヲ慰スル為メ招魂祭ヲ举行致候(中隊ノミ)、此戦況ハ別封ノ如シ。

桑名ヘハ別ニ通知致置候間、此戦況ハ岡山ヘ知セヤリ被下度候。松岡寿満子殿岐阜県鈴木弥等氏ト御結婚ノ由芽出度奉存候。謹テ兩人ノ万歳ヲ祈申候、親族間ニ芽出度キ事ヤ悲敷事ガ余リテ喜哀ノ情交々至リ申候、之レガ即チ浮世ノ常ナルカ、申迄モナキコトナガラ祝儀、不祝儀、夫々適當ニ欠札ナキ様頼申候。

此度ノ戦闘(中隊)ハ実ニ軍全般ニ多大ノ關係ヲ有スルコトトテ非常ノ功ト認メラレ居候。少數計リノ働ヲナシテ斯ク迄賞賛ヲ辱フシテハ恐レルル次第ニ御座候。早速中隊長殿ヘ御よろこびノ書状ヲ送ラレタシ。皆々様御撰養專一ニ奉祈候。

二月七日午後二時

延吉

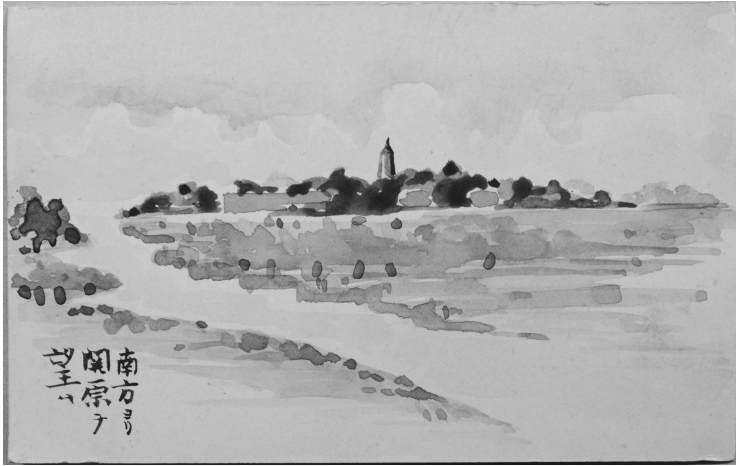
留守宅中

この戦鬪に關して、後日、第四軍司令官野津大将より感状をもらったことを伝える年月不詳の手紙^{④⑧}（一九〇五年二月中と推定）には、「謹呈過日申上候通り、二月二日払曉ニ於テ房身^{ボウシン}夜襲逆襲戦ニ対シ、軍司令官陸軍大将伯爵野津道貫閣下ヨリ我が中隊へ感状付与セラレ候間、右写御送り申上候、御喜被下度候。乍去此感状ヲ得タルハ小生等ノ僅カ計リノ勳ニアラズシテ、全ク此劇戦ニ名譽ノ戦死ヲ遂ゲタル忠勇ナル士卒ノ偉功ニ依ルコト、確信仕候。此感状ニ依リ中隊ノ名譽ヲ発揚シタルト共ニ益々忠勇ナル戦死者ヲ惜マザルヲ得不申候。此頃ハ其遺族ハ如何ニ悲敷日ヲ送りツ、アルカト転々暗涙ニ咽ビ居候。」と記されている。

房身の戦鬪は、一中隊二〇〇人余りで、連隊規模のロシア軍の猛攻を撃退し、しかも第五中隊の損害は、「戦死八負傷十三有之候へ共、将校ハ皆無事」（手紙^{②⑨}）という比較的少ないものであったので、第四軍司令官が感状を与え、着任直後の安東貞美第一〇師団長は中隊将校のために宴会を行つて第五中隊の功績に酬い、そして中隊の活躍は新聞にも取りあげられた。

奉天会戦の直前には、厳しい緘口令がひかれたらしく、「戦機モ大ニ熟シ、近々大活動モ有之ヤノ談ニ候」（手紙^{③①}、二月二二日）、あるいは「戦機大ニ熟シ既ニ二部ハ活動ヲ開始セリ、一大活動近キニアリ」（手紙^{③②}、二月二九日）などの、漠然とした記述しかない。

奉天会戦の際、歩兵第二〇連隊は三月二日から万宝山のロシア軍陣地の攻撃を行い、三月八日ようやく占領したが、この戦鬪で多数の戦死戦傷者が生じた。山脇自身は、戦鬪初日の三月二日に負傷したにもかかわらず、中隊長



図版6 山脇が描いた開原風景

の寺尾大尉が負傷して指揮不可能となったので、替わって山脇が中隊長代理として指揮を続けざるを得なかった。⁽⁷⁾そして、奉天会戦後、ロシア軍を追撃して鉄嶺北方の開原・昌図に達した時、下記のような手紙⁽³³⁾〔三月二三日〕が送られてきた。

拝啓其後追々心身ノ疲労モ恢復セリ。一般休養中ナルモ、我々先進部隊ハ前進ヲ続ケ居リ、過日開原ヲ攻略シ、一昨日又其北方(六里)昌図ヲ占領セリ。敵ハ統々北方ニ退却スルノミニシテ戰意更ニナキモノ如シ、或ハ遠クハルピン迄退却スルヤモ不計、我ハ何処迄モ長驅セン、遂ニ追ハシメ一人モ残ラヌ迄ニ打撃ヲ加ヘヤリタキモノニ御座候、草々。

三月廿三日 延吉

御母上様

御祖母上様

千代子殿

流行感冒ノ注意充分ナシ被下度候。

この後しばらくして送られてきた手紙⁽³⁴⁾〔三月二九日〕には、

山脇らしく、自筆の彩色絵葉書〔南方ヨリ開原ヲ望ム〕の説明文あり〕が同封されていた〔図版6〕。

6. 奉天北方の警備と帰国まで

奉天会戦以後の山脇の軍事郵便は、文書番号³⁵〔一九〇五年四月二日〕から⁴⁶〔九月二九日〕までの一二通が存在する。森本幸太郎軍曹の手記によれば、第一〇師団第二〇連隊第五中隊は、一九〇五年九月五日の日露講和条約調印後も満州に駐屯を続け、一九〇六年一月一八日に最終駐屯地孟家屯を出発、一月二五日に大連湾の柳樹屯で新竹丸に乗船して、凱旋の途に就いた⁸。つまり、日本に帰ったのは、一九〇六年一月末のはずであるので、九月末までしか山脇の軍事郵便が存在しない理由は明らかでない。可能性としては、一九〇五年一〇月以降の手紙が紛失したのか、あるいは何らかの事情で山脇が中隊より先に帰国したかであろうが、現時点で判断できない。

手紙³⁵（四月二日）と³⁶（四月四日）では、寄生虫のサナダムシ駆除のために柘榴ざくろの根を探し、煎じて服用した結果、駆除に成功した話が詳しく書かれているが（条虫ハ、柘榴ノ根ヲ以テ調剤セラレタル薬ノタメ、昨日午後二時難ナク下剤ト共ニ駆除セラレ候。頭モ付着致居候（顕微鏡デ見タリ）間御安神被下度候。昨日下リシ分ハ長サ四尺程ニテ、其以前ニ長サ壹丈二尺程下リ候間、条虫ノ長サハ壹丈五六尺以上ノ者ナリシコト明ニ御座候）〔手紙³⁶、四月四日〕、手紙³⁵には従軍以来の功績が評価されたため、中尉に昇進した事実とそれに対する山脇の感慨と同僚・新規徴兵者に対する評価が記されている部分がある。やや長文であるが、興味深い内容なので引用する。

（前略）中尉ニ昇進仕候。出征以来各処ノ戦闘ニ参加シ充分働ケル丈（自分ノ力デ）ハ尽申候。中尉ニ昇進シタカラツテ、別ニ夫程ウレシクモナイ。小生ハ本職ノ軍人ニアラズ、又軍人トシテ考フレバ、此戦争ニ中少尉否尉官位デ出征スルノハ（若シ本職タ

ラシメバ)、牛刀ヲ以テ鶏ヲ割クノ感ガアルノデアル。併シ本職デナイ義務ノ軍人ダカラ、其官職ノ高下ヲ論ズル限デナイ。

又、小生ノ頭ニハ君国アルノミデ毫頭功名ガナイノデアル、利己ノ精神ガナイノデアル。今日迄幾多ノ戦争ニ於テ常ニ前述ノ考ガ頭カラ去ラナイ、為ニ身ハ本職ノ軍人デアリナガラ、僅ナコトニカコツケテ戦線ヲ退イタリ、又卑劣ナ行動ヲシタリスルモノ多々アル、其中ニ在ツテ嚴然トシテ能ク其職務ヲ尽シ得タ訳デアル。小生ハ自己ノ名譽ナド云フコトハ更ニ頭ニ浮バナイ。此度ノ日露戦争ハ国家存亡ニ係ル実ニ大々国難デアル。君ガ有テ国ガ存ル訳ダカラ、人民ナンカハ其次ダ、君国ノ大難ニ国民ガ力ヲ尽スノハ当然デアル、己レノ利益ヲ計ルナンカハ以テノ外デアル。彼ノ乃木大将閣下ノ動作ハ如何ダ、実ニ彼ノ人コソ軍神デアルト深キ尊敬ヲ表スルノデアル。乃木閣下ノ腦中ニハ君国アリテ個人ナキコト視ヘ透テ居ル、誠ニ可感偉人デアル。斯ル偉人デコソ彼ノ攻難不落ノ旅順城ガ落チタノデアル。

次ニ三月二日万宝山ノ初日ノ戦ニ、三輪村ノ内志手原村歩兵少尉仲君ハ、小生ノ二三間左ニ居テ、右フトモ、ニ銃創ヲ受ケタガ、至極輕傷デ出血モ少ナカッタ。アレ位ナ創ナラバ勿論内地ヘ帰ル必要モナカローガ、之レハ其人ノ云ヒ様デドウデモナルコトダカラ明ナラズ、同君モ戦争ニ場ナレヌ故、誠ニイラザラン処デ負傷ヲシテ、肝心働カネバナラヌ時ニ働キガ出来ナカッタノハ、同郡出身者トシテ小生ノ深ク遺憾ニ感ズル処デアル。今度ノ戦ヒデモ新来ノ兵ニ死傷者ノ多キハ、ツマリ場ナレズ戦ガ下手ナカラデアル。道場村出身ノモノデ(歩兵第三十九連隊)戦死シタルモノハ、

清水平吉 須磨寅吉 西ノ上元吉

ノ三名アルコトヲ聞キ申候。誠ニ氣ノ毒ナコトニ御座候。又氣ノ毒ナコトニ赤見坂中尉ガ中尉ニ昇進セシコトヲ知ラズシテ、九月三日ニ戦死シタコトデアル。同君トハ同中隊ヘ志願兵トシテ入隊シ又見習士官モ同時ニヤツタ訳デ、又出征以來過日迄二人ノミ同期出身デ残り居リ居リシニ、遂ニ不帰ノ客トナリ、小生一人ノミト相成候。同期ノ者十六名ノ内、戦地ニアルハ市田軍医、高橋軍医及小生ノミ。(後略)

まず中尉昇進については、出征以来の自分の戦功を考慮すれば昇進は当然であると判断している（「出征以来各処ノ戦闘ニ参加シ充分働ケル丈（自分ノ力デ）ハ尽申候」）。その上で、中尉昇進について、自分自身は「別ニ夫程ウレシクモナイ」と述べる。その理由は、第一には、自分は職業軍人ではないこと、第二には、若し職業軍人として日露戦争に出征するならば、自分の能力・地位から考えると、小隊長や中隊長代理に相当する少尉・中尉では役不足、地位不足であると考えている（「此戦争ニ中少尉否尉官位デ出征スルノハ（若シ本職タラシメバ）、牛刀ヲ以テ鶏ヲ割クノ感ガアル」）からであった。

すでに述べたように、山脇は一年志願兵勤務と勤務演習を終え、一九〇三年、少尉に任官し、同時期に、有馬郡会議員・道場銀行頭取・道場村村長に就任した。東京大学工科大学土木科に学んだという高学歴の上に、地方名望家で地域指導者という役割を二〇歳代後半から歩みはじめていたので、少尉・中尉では自分には役不足と考えたのであろう。

現在の日本には軍隊がないため、日露戦争当時の軍の指導者がどの程度偉かったのかが分かりにくいので、次のような例えで説明してみよう。

日露戦争開戦時の陸軍師団数は一三個師団であった。当時の一師団は、四個歩兵連隊（二個連隊ずつ、二個歩兵旅団にまとめる）と各一個連隊ずつの兵科連隊（砲兵〔野砲と山砲の組合せ〕、騎兵、工兵、輜重兵などの連隊）で編制されていた。日露戦争準備が進みつつあった一九〇二年の数字をあげると、一三個師団、五二個歩兵連隊、一九個砲兵連隊、一七個騎兵連隊である。例外があるので数字が少しずれているが、今は問わない。そして、各部隊長官の階級は、師団長は中将、旅団長は少将、連隊長は大佐が原則で、その下は、大隊長は少佐、中隊長は大尉、小隊長は少尉となる。

一方、当時は四七道府県があり、その長は知事で、各道府県には複数の郡長と市町村長がいた。一八八九年、市制・町村制発足時の基礎自治体数（市町村数）は一万五八五九で、機械的に平均値を出すと一道府県当たり三三七の市町村があった。¹⁰⁾

以上の数字をもとに、陸軍と道府県・市町村を比較すると、知事と旅団長・連隊長（少将と大佐）はほぼ同格、師団長は一般の知事より上で、東京・大阪などの府知事と同格であると考えられる。市長や町村長は、市町村の規模によって違うが、大隊長や中隊長並みであろうか。

以上は数字の遊びの面もあるが、当時の感覚を推察するために敢えて考えてみた。山脇が、市町村長（少佐か大尉）より下の、中尉に任官したことを役不足と考えて、「別ニ夫程ウレシクモナイ」と言った理由が、上記の数字から分かる気がする。ただし、手紙^④（七月二七日）以降は、裏面に「出征第十師団歩兵第廿連隊第五中隊 陸軍歩兵中尉 山脇延吉」と印刷された封筒を使用しているので、中尉昇進が本当は嬉しく、誇らしかったのかもしれない。人間心理の、本音と建前を見るようである。

以上の自己評価の後で、山脇は自分は日露戦争にあたって「功名心」「利己ノ精神」を捨てて、国家のために献身している、自分が尊敬するのは乃木大将であると述べ（「乃木閣下ノ脳中ニハ君国アリテ個人ナキコト視ヘ透テ居ル、誠ニ可感偉人デアル」）、返す刀で職業軍人であるにもかかわらず、我が身可愛さで、些細な負傷・病気を理由に戦場を離れる輩について、実名を挙げて批判する。さらに、地元出身の兵士たちの被害について言及した後で、同期の一年志願兵仲間で日露戦に出征した一六名のうち、現在戦地にあるのは、自分を含め僅かに三名のみであると述べる（「同期ノ者十六名ノ内、戦地ニアルハ市田軍医、高橋軍医及小生ノミ」）。しかも、三名のうち二人は、後方にいる軍医であった。この数字からも、日露戦争における最前線の下級指揮官の消耗の激しさと、一年志願兵

出身の将校の重要性が分かる。

奉天会戦以後の開原地域での警備活動は、のんびりとした勤務であったのではないかと想像していたが、ロシア軍がヨーロッパ方面から軍隊の増強を続け、奉天方面の日本軍に圧力をかけ続けたため、かなり緊迫した状況が続いたことが、その後の手紙から読み取れる。

手紙³⁸〔五月八日〕では、戦争が何時まで続くのかと思索しながら、新聞紙上に見えるバルチック艦隊の動静を案じている。五月二七日から二八日にかけて行われた日本海海戦が日本の勝利におわり、講和条約への動きが高まり、新聞紙上でこの情報を知った頃の手紙³⁹〔六月二三日〕は、短いながら、満州の緊張状態、講和への期待感と幼い富美子の教育に心を配る父親の顔がうかがえるので引用する。

拝啓皆々様益々御壯康大賀ニ候。追々暑氣相加り申候間御要神專一二奉祈候。四月分一個、五月分一個（蚊帳入）追送品確ニ有難受取申候、種々結構ナル品々有難存シ御礼申上候。

去ル十八日午後三時ヨリ我連隊及砲、キ、工兵連合ニテ威遠堡門ヨリ東北方約七里ノ処迄偵察ニ参リ、昼夜兼行ニテ偵察従事シ、二十日午後一時当地（開原ノ北方二里ニ滞陣）ニ帰来致候。此頃ノ暑氣ハ日中屋外ニテ百十度ニ御座候。此偵察戦ニテ中隊二二名ノ軽傷者アリシノミニ御座候、何レモ皆兵卒ニ御座候。

此頃、新聞紙ニ記スル処ニヨレバ、平和平和ヲ持切り居候、如何ノモノニヤ。富美子益々生長ノ由、適当ナル養育ニ注意シ、偏愛セザル様頼申候。種々申上度コト有之候へ共、後便ニテ申上候、草々。

六月廿三日 延吉

留守宅中

この後の手紙にも、故郷・家族への思いと講和への思いを露わにする文言が見られる。手紙④〇〔七月二十七日〕の手紙には、三田で疑似コレラが発生したという新聞記事を見たらしく、「新聞ニテ三田ニ疑似コレラ発生ノコトヲ承知、時分柄御用心專一ニ頼申候、生水不熟ノ菓物、寝冷等ハ嚴禁ニ候」と書き、手紙④①〔八月二日〕には、「雨風に思はぬことはなかりけり、我故郷の天はいかにと。新聞紙上に有馬、三田間自動車交通ノ由、老人小供は申迄モナク、皆々様充分ナル注意ヲ要申候。随分速力ガ速ナルヲ以テ、危険此上ナキモノニ候」と書いて注意を喚起している。また、同じ手紙に、「彼我の講和委員も近々会見することでありましよふが、願くば米國大統領の目的を達成させ、円満なる平和の成立を見たいものであります、種々内外の事情を考ふれば何時迄も樂天的計りでもありませんまひ」と、講和成立への期待を記している。

夏から秋に向かうと、満州中部の平原は一面のお花畑に替わり、山脇には花を摘んで、押し花を手紙に添えて送る風流なところもあった。「拜啓当地ノ雨期モ漸ク過ギテ俄ニ朝夕冷氣ヲ催申候。昨年ノ此頃トハ実ニ雲泥ノ差有之申候。目下前哨勤務ニ服居候、付近ノ野ハ実ニ百花園ニシテ万野皆花ナラザルハナク、中ニモ遠征ノ勇士ヲシテ一種無量ノ感ニ打タシムルハ、桔梗、女郎花、萩ヲ初メシ誠ニ見ナレヌ美花ノミニ有之候。殊ニ紫、黄色ノ物多ク、紅色ノモノ至ツテ少キハ、却テ内地ノ秋ノ野辺ニ優レル乎ト存候。其内一、二押花トシテ封入致申候、是等ハ内地ニハ無之モノニ御座候」(手紙④③〔八月二〇日])。

そして、このお花畑では相変わらず日露両軍のにらみ合いと小規模な戦闘が続き、時には日本軍の負け戦さになつていたこと、そして講和談判の結果を固唾を呑んで見守っている山脇の心情を、手紙④④〔九月六日〕が伝えている。

（前略）当方面別ニ変リタルコトナキモ、去ル廿七日朝早くヨリ敵ノ砲兵ハ我カ小哨付近ヲ砲撃シタルヲ以テ一時警戒致居候処、別ニ差シタルコトモナケレバ、斥候ヲ前方ノ高地ニ派シ偵察セシメタルニ前進ノ模様ナク、斥候ハ歸路一名露兵ヲ捕獲セリ。此日我ガ小隊ハ小哨ヲ交代シテ歸來シ、田辺中尉ノ率ユル第一小隊ト交代セシガ、廿九日、田辺小隊ヨリ派遣シタル八名ノ斥候ハ、百余名ノ敵ニ包圍セラレ、一名戦死シ、三名ハ行衛不明（捕獲セラレタリ）、唯四名ノミ歸來セリ。出征以來名譽連隊中ノ名譽中隊トシテ一ノ欠点ナカリシ中隊ニ、一大汚点ヲ残シタルコソ残念此上ナキコトナガラ、幸ニシテ小生ノ隊ハ敵ヲ捕ヘタル位ナレバ責任ハ更ニナク、全ク他小隊ノコトニテ誠ニ幸運ト云フ外ナシ。由來、好言麗色〔巧言令色カ〕ヲ之レ事トシ、当世流ノ輕薄才子ヲ氣取レル頭中、更ニ誠意ナキモノハ多クハ斯メコトニ立至ルベシト考へ、益々慎重ノ態度ヲ以テ公事大切ニ勉勵致居候間、是又御安神被下度候。

談判モ晴カ雨カ日々其報導ヲ異ニセリ。従ツテ条件モ面白カラヌ様子、如何ナル局ヲ結ブベキモノ乎。我ハ準備既ニ整ヒ一点ノ欠点ナシ。何時ニテモ迅雷耳ヲ掩フニ暇アラザラシムルノ壮挙ヲ事実上ニ見ルベキ乎、將タ見ズシテ止ムベキ乎。

九月六日 延吉

留守宅中

ポーツマス講和会議は、一九〇五年八月一〇日に始まり、日本側は小村寿太郎外相・高平小五郎駐米公使が全権として出席し、ロシア側はウィット・ローゼン両全権が出席した。日本側の主張する講和条約の絶対条件をロシア側は早期に受け入れ、残りは交渉の過程で譲歩または駆け引きの材料として使用する相対条件と付加条件（樺太割譲と戦費賠償が主要な項目）の交渉に移った。ところが、日本国内の世論が極端な強硬論に傾斜し、賠償金獲得と樺太割譲を強く要求し、主要新聞がそれに同調したので、日本政府と日本側全権は妥協できなくなつて交渉は難航

した。結局、八月二九日の第一〇回本会議で、日本側は賠償金を断念し、ロシアが南樺太を日本に割譲することで妥協が成立し、九月五日、講和条約の調印式が行われた。

日本国内では日露交渉の経過は秘密とされていたが、日本の新聞はイギリスとアメリカの新聞報道から交渉経過と日本側の譲歩を知り、日本政府の対応を批判する報道を行った。九月五日、日比谷公園で講和反対国民大会が行われ、参加者は『国民新聞』など政府系新聞と交番を焼き討ちした。いわゆる日比谷焼打ち事件である。講和反対集会は、全国の主要都市に波及し、九月六日、政府は東京市と周辺に戒厳令を施行した。⁽¹⁾

講和条約に基づく休戦と内地の講和反対運動の新聞報道に接すると、山脇は、講和反対運動を批判するとともに「国民中ニ露国民以上ノ馬鹿者モアルコトヲ承知スルノミ」、軍人は政治に口を挟むべきではないと強調し、家族にも念押ししている（手紙^④〔九月一九日〕）。

（前略）当方面十六日正午ヨリ休戦ニ有之候へ共、警戒ハ依然トシテ変ルコト更ニ無之候。内地新聞紙ニハ種々内地ノ模様記載有之候へ共、更ニ何ノコトヤラ相分ラズ、唯々国民中ニ露国民以上ノ馬鹿者モアルコトヲ承知スルノミ。右ニ付留守宅中ニ注意スルコト左ノ如シ。

軍人ハ敵ト交戦スルガ本職ナラバ、戦闘ヲナシ敵ヲ撃破シ再ビ立ツ能ハザラシメバ、其ニテ本分ヲ尽シタルモノト可云。我々ハ出征以来一年有半ノ間常ニ勝軍ヲナシ、未ダ幸ニシテ一回タリトモ不覚ハ不取今日ニ至リ居候間、其本分ハ十分尽シタルモノト自信致候。軍人ハ政事ヲ論ジ彼是云フベキモノニアラザレバ、此際自分ノ本分以外ノ事ニ彼是レ吻ヲ入ル、ベキモノニアラズ、唯沈黙ヲ守ルベキナリ。其留守宅ニ於テモ同様ノ考ナケレバアルベカラズ、右嚴重ニ戒申候。（後略）

そして、山脇の戦場からの最後の手紙（現在の山脇延吉家文書の日露戦争軍事郵便中の）は、九月二九日付の手紙^④である。この手紙の中にある「戦場掃除」とは、講和条約の成立によって戦闘が終了後、現地に戦死者・戦病死者を仮埋葬した墓地や埋葬地を調査・発掘し、土葬の死体は現地で火葬し、火葬済みの遺骨は収集して、遺骨と遺灰を留守師団に送るといふものである。手紙にある、「遼陽掃除区域ハ白石墓ヨリ遼陽ノ東北太子河ニ亘ル線ニシテ、十五里ノ程ノ間」とあるのは、遼陽の会戦の際の第一〇師団の作戦地域と思われる。山脇はこの仕事を、「君国ノ為メ忠死ヲ遂ゲタル護国ノ神ノ遺骨、之ガ収集ノ大任」あるいは「名譽アル此大任」と意味づけて、師団の各兵科から選抜された約八〇名を率いて、約二週間にわたる仕事に当たった。

拝啓小生本月廿四日師団司令部ニ出頭左ノ命令ヲ受ク。

歩兵中尉山脇延吉

命遼陽掃除隊長。即チ、遼陽付近ニ埋葬セル戦病死者ノ遺骨残灰ヲ収集シ、之レヲ転埋スルニアリ。即チ、師団内各歩兵連隊、砲、工、騎、輜重ノ各部隊ヨリ当時ノ状況ニ精通セルモノヲ撰抜セル八十名計リノ一隊ヲ率ヒ、廿六日開原停車場ニテ乗車、昨廿七日午前十時当遼陽ニ下車、一年振ニ因縁深キ遼陽ニ帰来仕候。本日ハ故戦場墓地視察ノ為メ斥候ヲ派遣シ、明日ヨリ掃除ニ着手可致候。遼陽掃除隊ノ掃除区域ハ白石墓ヨリ遼陽ノ東北太子河ニ亘ル線ニシテ、十五里ノ程ノ間ニテ小生ニトリテハ最モ得意ノ箇所ニ御座候。土葬ノ俣ノモノ百五十余モ有之、之等ハ皆火葬ニ付シ、留守師団ニ発送可致予定ニ御座候。君国ノ為メ忠死ヲ遂ゲタル護国ノ神ノ遺骨、之ガ収集ノ大任ヲ負ヒ、今日再ビ此故戦場ヲ視ルニ及ビ、云フベカラザル深キ感ニ打レ申候。名譽アル此大任ヲ全フシ、二週日ノ後、師団ニ帰り復命可致コトニ有之申候。今回引率セル八十名ノ勇士ハ皆武功赫々タルノ人々ニシテ、出征以来幾多ノ戦闘ヲ経、今尚健全ナル各隊ノ選抜者也。右御知セ申上候、大多忙。

遼陽停車場付近出張

九月廿八日 山脇延吉

留守宅中

手紙八元ノ如ク隊宛ノコト

この仕事の報告書を作る資料、作業記録が山脇延吉家文書にある。『雑書綴 遼陽掃除隊 山脇中尉』（目録番号二六一）がそれである。綴りの末尾の報告書草案（「概要」）によれば、六〇〇名以上の遺骨・残灰を収集し、五個の遺骨箱に収めて姫路の留守師団へ送ったとある。埋葬地の情況も詳しく報告されており、兵站司令部の手で発掘済みの墓地もあれば、住民の耕作や野犬が掘り起こしたために、墓標は倒され、遺骨が散乱している場合もあったと記されている。この戦場掃除で、山脇の白露戦争体験は終了した。

むすびにかえて―山脇延吉と在郷軍人会活動―

以上、白露戦争に従軍した予備役少尉山脇延吉が記した白露戦争の軍事郵便の一部を紹介した。四〇数通の軍事郵便を通読した印象は、山脇は自分で、「出征以来各処ノ戦闘ニ参加シ充分働ケル丈（自分ノ力デ）ハ尽申候」（手紙³⁵（一九〇五年四月二日））と言っているように、白露戦争を第一線の下級将校として戦い抜き、上官と指揮下の下士官・兵卒の双方から信頼された、頼もしい存在であったというものである。生粋の職業軍人以外にも、彼のような一年志願兵の将校がある程度の層として存在していて、消耗の激しかった下級将校を補充できたことが、日

露戦争時の日本陸軍を支える力になったと評価できるだろう。

手紙を見る限り、彼は明治国家と天皇に対する信頼感や尊崇の念を持っているものの、その思想は極端な軍国主義や国家主義ではなく、高学歴の故に広い視野を持ち国内外の情勢を知っていたため、戦争に対する見方も穏健で常識的なものであった。時には、所属する陸軍を突き放して見ることもできた。そして、地方名望家としての自負と責任感を持ち、家族に対する責任感と愛情も深かった。本稿では紹介することが少なかったが、家業の銀行業と山林経営の仕事は戦場にまで彼を追いかけてきて、彼は戦地から家業に関する指示をだす必要があった。

彼は、遼陽と奉天で二度負傷したが、大きな後遺症なく生還できたという点では、幸運であった。山脇は戦場から生還した後、再び故郷と家族のために働きはじめたが、その仕事の一つに在郷軍人会活動があった。

現役を離れた軍人は在郷軍人と呼ばれるが、その全国組織である帝国在郷軍人会は、一九一〇年に結成された。この組織は、陸軍省軍事課長田中義一がドイツの事例に倣って組織したと言われている。山脇は日露戦争から凱旋した後、有馬郡在郷軍人会の創設に努力し、日本で最初の連合分会を結成、そして帝国在郷軍人会が組織されると、篠山支部理事、有馬郡連合分会長に就任した。山脇が、一九一三年に歩兵大尉に抜擢されたのは、在郷軍人会活動に対する貢献を評価されてのものであったと想像できる¹²。さきに述べたように、大尉は小規模な町村の町村長並みであるので、歩兵大尉の階級は、山脇にとって最低限の自負心を満たすものであったのかもしれない。

彼は在郷軍人会を通じて、この後も陸軍と関係を持ち、同時に陸軍に親近感を持ち続けた。その基礎には、厳しくも懐かしかった日露戦争の戦場体験と成功体験があったと想像することができる。そして昭和恐慌期に、山脇が自力更生運動と、それにつづいて、国家改造を目指す親軍的・ファッショ的な大日本農道会結成にのりだす基礎には、日露戦争を通じて培った、陸軍に対する親近感と信頼感があったのではなからうか。

- (1) 日本近代資料研究会編『日本陸海軍の制度・組織・準備』（東京大学出版会、一九七一年）の「上原勇作」の項目参照。
- (2) 谷虎雄「第四章 日露戦争、第七節 沙河会戦、対陣、黒溝台会戦」（『近代日本戦争史 第一編 日清・日露戦争』、同台経済懇話会、一九九五年所収）および、桑田悦編『日本の戦争・図解とデータ』（原書房、一九八二年）参照。この他に、軍隊の編制については、上法快男編『帝国陸軍編制総覧』（芙蓉書房、一九八七年）の「付表2 陸軍常備団隊配備表・明治二九年三月一日」および「付表3 陸軍常備団隊配備表・明治四〇年九月一日」を参照した。
- (3) 前掲、谷虎雄「第四章 日露戦争、第七節 沙河会戦、対陣、黒溝台会戦」参照。
- (4) 山田朗「戦争の日本史20日露戦争」（吉川弘文館、二〇〇九年）、一五六～一五九頁。
- (5) 前掲、山田「日露戦争」、一五九～一六三頁。
- (6) 谷虎雄「第四章 第八節 奉天会戦と有利な戦争終末を目指す戦争指導」（前掲『近代日本戦争史・第一編』）参照。
- (7) 前掲、『山脇延吉翁遺風』、「歩兵第二十連隊第五中隊戦闘履歴」、四九～五二頁。
- (8) 前掲、『山脇延吉翁遺風』、「歩兵第二十連隊第五中隊戦闘履歴」、五三頁。
- (9) 山田朗「軍備拡張の近代史―日本軍の膨張と崩壊―」（吉川弘文館、一九九七年）二〇～二三頁。
- (10) 総務省、市町村合併資料集より。http://www.soumu.go.jp/gapei/gapei2.html
- (11) 前掲、山田「日露戦争」、二一〇～二二六頁。
- (12) 前掲、『山脇延吉翁遺風』、六～七頁。